

■研究調査レビュー

沖永良部島知名町のトゥール墓について

—知名町指定史跡を中心として—
宮城 幸也（知名町教育委員会）

1. はじめに

沖永良部島は、奄美諸島南部の徳之島と与論島間に位置し、南西諸島のほぼ中央部に位置している。周囲49.3km、面積94.5km²、最高部標高245mという規模であり、南西に幅広い長三角形の輪郭を呈する低平な隆起サンゴ礁の島である。行政区分上は鹿児島県大島郡に属し、知名町・和泊町の二町で構成される。

地質学的にみると古生層を基盤とした第四紀琉球層群（隆起珊瑚礁）からなる比較的平坦な島で、最高所の大山（標高245m）を取り巻くような形で数段の段丘が形成されている。全島にわたって石灰岩に覆われているため、雨水は地下に浸透して段丘間の斜面下、ドリーネの底部、浸食の進んだ部分あるいは海岸付近に湧水・暗川となって現れ、地下には石灰岩洞穴を数多く形成している。これらの湧水・暗川は河川の少ない沖永良部島においては、この水源が先史時代から現代に至る

まで集落の立地を規定する要因となっている。

上述したような環境の中、沖永良部島には、古くから、琉球石灰岩岩盤を掘り込んで造られた岩陰墓・掘り込み墓（以下、トゥール墓）が島内に数多く点在していた。民俗学分野の研究でも、おおよその位置や個数が記録されており、当時の沖永良部島の慣習を知るうえで貴重な遺産となっていた。しかし、現在では基盤整備等によりその数は少なくなっており、また、現存する墓も、自然災害・風化によって部分的だが破損が目立つ。

これらの状況を踏まえ、町教育委員会では平成24年度から国庫補助事業を使ったトゥール墓の確認調査を継続して行っており、これらと合わせ、地域住民を対象とした普及・啓発活動を他事業と連携して実施しているところである。本報告では、町指定史跡のトゥール墓についての概要及び調査成果の一部を紹介し、平成27年度に公民館講座で実施した



図1 各トゥール墓の位置

「知名町墓めぐり」についても紹介しながら、今後の課題についても言及していく。

2. 知名町のトゥール墓

知名町指定史跡としての墓は、屋者琉球式墳墓、アーニマガヤトゥール墓、新城花窪ニャート墓、屋子母セージマ古墳跡の4遺跡である。屋子母セージマ古墳跡を除いた3遺跡は、平成24年度～26年度に国庫補助事業での確認調査が行われ、調査成果については現在整理段階である。以下、各墓の概要について述べ、調査成果については一部のみ記載する。

(1) 屋者琉球式墳墓

屋者琉球式墳墓は、知名町大字屋者に所在するトゥール墓である(写真1)。1966年に町指定史跡となった墓で、文献史学によると、中世期に沖永良部島を治めていたとされる「えらぶ世之主」の四天王の一人として仕えた屋者マサバルの墓と言われており、その築造には沖縄の石工と屋者集落民が動員されたという。墓の規模は小さいが、石灰岩盤を掘り下げ、横穴を掘り形成した墓室と周囲に石垣等を配した前庭部からなる構造となっている。屋根は切妻式の形状で、棟木にあたるころは方形状に加工された石材が直線的に並べられている(写真2)。墓室には人骨を納めるために使用された蔵骨器片が散在しており、少量ではあるが供献陶磁器も確認されている。

屋者琉球式墳墓からの遺物は、蔵骨器と供献陶磁器が得られた。蔵骨器の種類は、沖縄産専用蔵骨器・厨子甕、転用品蔵骨器として使われた薩摩焼(苗代川産の甕)・沖縄産陶器(甕・壺)が得られ、時期は17世紀後半～19世紀に該当すると思われる。薩摩焼は、口唇部に貝目積み痕が付いたものが見受けられる。供献陶磁器からは、肥前産・薩摩産・清朝・沖縄産が得られ、器種は碗と瓶にほぼ限定されることが分かっている。肥前産磁器は17世紀後半～18世紀後半、薩摩産磁器は18世紀末～19世紀中頃、清朝磁器は17世紀後半

～19世紀と考えられる。陶器では、加治木・始良系陶器や沖縄産施釉陶器が得られ、前者が18世紀後半、後者が17世紀後半～18世紀前半と推測される。

これらの遺物だが、多くが左前庭部隅に設けられた方形状の小区画から得られた。小破片の状態で一括しての状況のため、この場所は遺物の廃棄場所として機能していた可能性が考えられる。

(2) アーニマガヤトゥール墓

アーニマガヤトゥール墓は、知名町大字赤嶺に所在する。1609年の薩摩侵攻以降、沖永良部島を訪れた薩摩の人々の影響を受けこの墓は造られたとされ、古老の話によれば共同墓地として赤嶺集落以外の遠方集落からも風葬で利用したという説、その他、この地域の豪族の個人墓という言い伝えも残るが文献史料が乏しいため判然としない。1971年に町指定史跡となっており、名称についてはアーニ(赤嶺)・マガヤ(小字名)の場所にあるトゥール墓と言うことで付けられている(写真3)。墓室内には、蔵骨器を安置するための棚が正面奥壁と左右側壁に凸状に成形されて造られ(写真4:矢印方向は棚)、平面観は出窓状を呈する。現時点では、この棚成形は屋者琉球式墳墓と新城花窪ニャート墓には見受けられない。

アーニマガヤトゥール墓からの遺物は、転用蔵骨器と供献陶磁器が得られた。転用蔵骨器の薩摩焼は貝目積み痕を有するものがあることから、時期は17世紀後半～18世紀前半に含まれる。少量ではあるが南中国産褐釉陶器も得られ、時期については15世紀～16世紀と思われる。また、由来不明の採集遺物ではあるが16世紀後半の沖縄産瓦質陶器も僅かだが得られている。供献陶磁器からは、肥前産・薩摩産・京焼色絵などが得られ、これらは17世紀後半～19世紀の時期に含まれる。

(3) 新城花窪ニャート墓

新城花窪ニャート墓は、知名町大字新城に



写真1 屋者琉球式墳墓（西より）



写真5 新城花窪ニャート墓（北より）



写真2 切妻式の屋根側面（南より）



写真6 墓室内の状況（南より）



写真3 アーニマガヤトゥール墓（南より）



写真7 墓室内右壁側（南より）



写真4 墓室内の状況（南より）



写真8 墓室内左壁側（南より）

所在する遠矢家の旧墓地で、1977年に町指定史跡となっている(写真5)。また、ニヤートとは遠矢の屋号である。文献史学では、1804年～1806年まで沖永良部代官として赴任していた遠矢金兵衛が、その妻子のために造らせた説が残っている。文献及び聞き取り調査などによれば、明治10年に遠矢家墓を上城集落に移したことが分かっている。そのため、現在では墓としては機能していない。ニヤート墓には、前庭・中庭が造られており、その間を石門で区切っている。この形状に類似するものは知名町では確認されておらず、和泊町に所在する世之主の墓とチュラドゥール墓が類似する。墓室内の左右側壁隅には、数基の転用蔵骨器とその中に納められた人骨が数多く残っている(写真6)。遠矢氏からの情報では、右側壁隅に一族の遺骨を納めた蔵骨器がまとめられ(写真7)、左側壁隅に集められた蔵骨器には、当時仕えていた使用人の遺骨が納められているとのことである(写真8)。

新城花窪ニヤート墓からの遺物は、転用蔵骨器と供献陶磁器が得られた。転用蔵骨器は薩摩焼(苗代川産の甕)がほとんどで、沖縄産の厨子甕・転用品蔵骨器は僅かのみ確認された。供献陶磁器からは、肥前産・薩摩産・が得られ、器種は碗のみである。肥前産磁器は17世紀後半～18世紀後半、薩摩産磁器は18世紀末～19世紀中頃、陶器では、薩摩産(龍門司産碗)や沖縄産無釉陶器が得られた。

(4) 屋子母セージマ古墳墓

屋子母セージマ古墳跡は、知名町大字屋子母に所在し、1966年に町指定史跡となった墓である。上記の3遺跡と比較すると、墓の構造はやや簡略化されているため権力者の墓の可能性は低く、庶民の共同墓として使用されていたことが考えられる。

屋子母セージマ古墳跡からの遺物は、前庭部外側周辺に沖縄産蔵骨器と石灰岩製蔵骨器が残る。また、前庭部内側に置かれた墓石には天文年間の年号が刻まれている。文字記録が極めて少ないため、貴重な資料になりうる

であろう。

3. ツール墓の普及・啓発活動

本町では、先史時代の遺跡として著名な国指定史跡である住吉貝塚をはじめ、学史的にも貴重な遺跡であるスセン當貝塚、神野貝塚、中甫洞穴がある。そのため、町教育委員会は活用事業として普及・啓発活動をこれまでに実施しており、地域住民も遺跡の存在やその文化財的価値について理解が進んできている。

しかし、近年、少子化や過疎化といった社会情勢に伴い、従来から受け継がれてきた墓の文化についての概念が変わりつつあるため、これを契機として、ツール墓をはじめ、身近にある墓についても理解・関心を深めるために公民館講座事業と連携した「知名町墓めぐり」を平成27年度に開催した。参加者は約20名でご年配の方が多く、ほとんどの方がこれまでにツール墓を訪れたことがなく、また、各墓の歴史について学ぶ機会も少なかったという。この講座を通して、墓の構造や見つけた遺物について関心を持たれた方が多かったので、本事業を継続してツール墓の普及・啓発活動を実施していく必要性を感じた(写真9)。



写真9 知名町墓めぐり実施状況

4. おわりに

知名町に所在する町指定史跡の墓は、平成24年度から継続して確認調査が行われてきており、平成28年度には屋子母セージマ古墳跡が調査予定となっている。各墓の整理が進むにつれ、今後、さらに詳しいことが分かってくると思われる。

今後の課題としては、①考古資料と文献史料の比較再検討、②墓の保存・整備対策、③普及・啓発活動、の3点が挙げられる。特に、①については、沖永良部島に古くから語り継がれる「えらぶ世之主」の伝説が強く残っているため、郷土史家をはじめ島外の各分野の研究者との建設的な議論とともに、新たな歴史像が構築されていくことを希望したい。

参考文献（刊行年順）

- 永吉 毅『えらぶの古習俗』道の島 1981年
知名町誌編纂委員会【編】『知名町誌』知名町役場 1982年
先間政明『知名町地名考』八重岳書房 1989年
先田光演【編】『奄美の歴史とシマの民俗』まろうど社 1999年
九州近世陶磁学会【編】『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000年
沖縄県立博物館・美術館【編】『ずしがめの世界—博物館企画展—』沖縄県立博物館・美術館 2008年
新里亮人【編】『中筋川トゥール墓跡』伊仙町教育委員会 2010年
沖縄考古学会【編】『琉球近世墓の考古学—発表報告編—（沖縄考古学会 2013年度発表研究会）』沖縄考古学会 2013年
新垣 力「17～19世紀の琉球列島における貿易陶磁の様相」『琉球列島の貿易陶磁（第35回日本貿易陶磁研究集会）』日本貿易陶磁器研究会 2014年